

[野菜部門]

3. 害虫誘引植物を用いた雨除け栽培トマトでの白ぶくれ症抑制

[要約]

雨除け栽培トマトではカリフォルニアポピーとペチュニアをビニルハウス側面の換気部沿いに植えると、これらの誘引効果によりヒラズハナアザミウマ雌成虫のハウス内への飛び込みが減少し、慣行の殺虫剤散布と同程度までトマト白ぶくれ症の被害を抑制できる。

[担当] 野菜・花研究室、病虫研究室

[連絡先] 電話 086-955-0277

[分類] 情報

[背景・ねらい]

景観植物のカリフォルニアポピーやペチュニアの花にはヒラズハナアザミウマ成虫が多く誘引されるが、幼虫の発生は少ない。このような景観植物からなるフラワーベルトを野外に設けてヒラズハナアザミウマ成虫を誘引し施設内への飛び込みを減らすことで、白ぶくれ症の被害を抑制する農薬削減技術を開発する。

[成果の内容・特徴]

1. ビニルハウス両側面換気部の外側の露地にカリフォルニアポピーは前年秋から栽培し、ペチュニアは5月末頃定植する。栽植密度は30 cm×30 cmとし、2条ずつ栽培する。なお、カリフォルニアポピーへはオンコル粒剤5を6月上旬に6 kg/10 a 株元処理し、その10～14日後に2回目の処理を実施する。
2. カリフォルニアポピー及びペチュニアの混植によりヒラズハナアザミウマの発生が多い6～7月の期間、開花が連続した状態に持続できる。これらの花にヒラズハナアザミウマ雌成虫が誘引され、トマトの花ではヒラズハナアザミウマ雌成虫の密度は低下し白ぶくれ症による被害果の発生が軽減される（図1、図2）。

[成果の活用面・留意点]

1. 景観植物の栽培とトマトへの殺虫剤散布を併用すると防除効果は高まる。
2. 景観植物の低コスト・省力栽培法を今後検討する必要がある。
3. 景観植物の発育、開花期、害虫の発生などは地域により異なる。
4. ヒラズハナアザミウマの多発年での検討を行っていないなど、試験例数が少ないので、実用性について、さらに検討する必要がある。

[具体的データ]

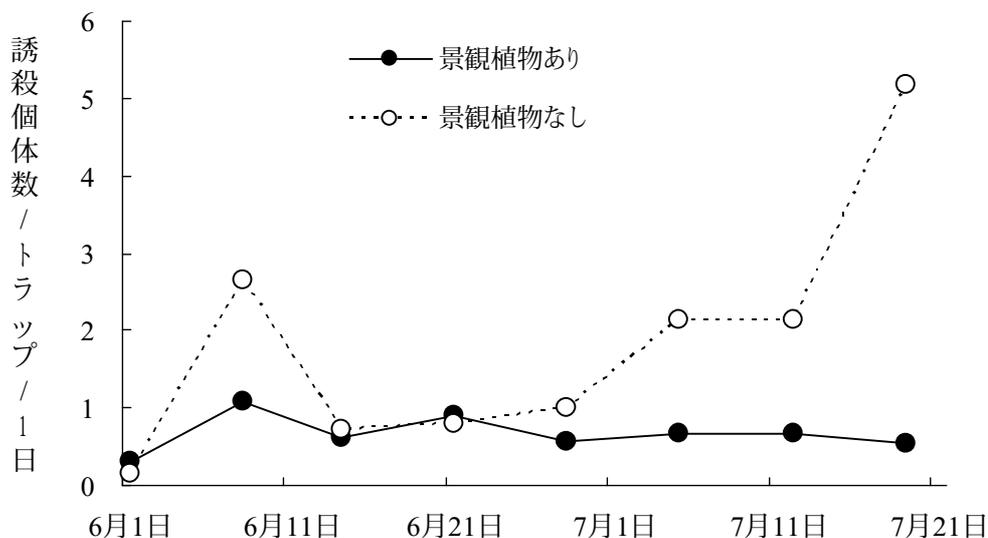


図1 景観植物の混作がヒラズハナアザミウマのハウス内への飛び込みに及ぼす影響

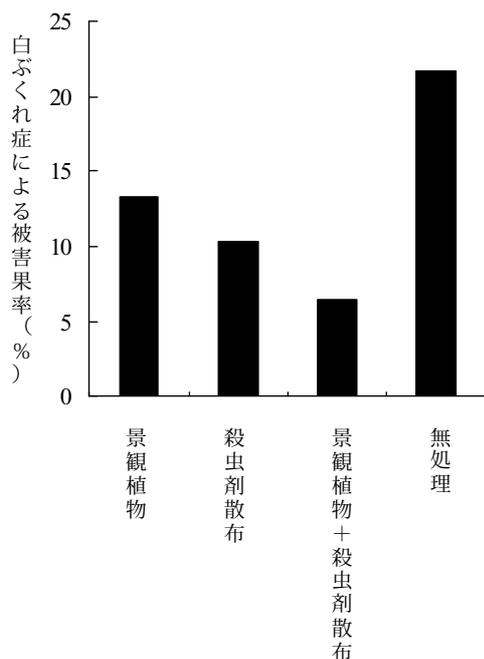


図2 景観植物の混作がヒラズハナアザミウマによる白ぶくれ症の発生を抑制する効果²

²殺虫剤散布は、モスピラン水溶剤 2000 倍液 (200L/10a) を 7 月 8 日と 22 日に、スピノエース顆粒水和剤 5000 倍液(250~300L/10a)を 7 月 6 日と 20 日に実施した。

[その他]

研究課題名：景観植物の害虫誘引機能等を活用した害虫防除技術の開発

予算区分：受託（生物機能プロ）

研究期間：2007～2008 年度

研究担当者：飛川光治、永井一哉、近藤 章